

小児用肺炎球菌ワクチンの接種にあたって

1．小児の肺炎球菌感染症について

肺炎球菌は乳幼児の鼻や咽頭に高率に存在する常在菌で、ときに細菌性髄膜炎、菌血症、肺炎、副鼻腔炎、中耳炎といった病気を起こす事があります。インフルエンザ菌に比べて頻度は低いですが、細菌性髄膜炎や菌血症等を発症すると、てんかんや精神発達遅滞などの後遺症を残したり、死に至る場合もあります。

初期の段階ではかぜと区別がつきにくく、生後3ヶ月～5歳ぐらいでは重症化することも多いです。

2．小児用肺炎球菌ワクチンの有効性について

小児用肺炎球菌ワクチンは、子どもが重い病気を起こす原因となる肺炎球菌のうち、7つの血清型で起こる重症感染症の約7割以上を予防することができるワクチンです。

このワクチンの接種により重い感染症（細菌性髄膜炎、菌血症など）を予防することができます。

3．接種スケジュールについて

(1) 標準的な接種

a. 初回免疫：生後2ヶ月以上7ヶ月未満で開始し、27日以上の間隔で3回接種。

3回目の接種は12ヶ月未満までに完了。

b. 追加免疫；3回目の接種後60日以上の間隔で1回接種。

標準的には12ヶ月～15ヶ月の間に行う。

(2) 標準的な期間の接種を逃した場合

1) 7ヶ月以上12ヶ月未満で開始

a. 初回免疫：27日以上の間隔で2回接種。

b. 追加免疫；2回目の接種後60日以上の間隔で1回接種。

2) 12ヶ月以上2歳未満で開始

60日以上の間隔で2回接種。

3) 2歳以上5歳未満で開始

1回接種。

4．副反応について

小児用肺炎球菌の副反応として、注射部位の症状（赤み、硬結、腫れ、痛みなど）、発熱（37.5度以上）などです。ただし、非常にまれですが、海外で次のような副反応が報告されています。

(1) ショック、アナフィラキシー様症状（通常接種後30分以内に出現する呼吸困難や全身性のじんましんなどを伴う重いアレルギー反応）

(2) けいれん。